

歴史は未来の羅針盤

温故知新

『近江日野の歴史』第二巻「中世編」は、第一章「鎌倉・室町時代の日野」、第二章「日野の中世社会と文化」、第三章「戦国時代の日野」、第四章「信長・秀吉時代の日野」からなります。役場・公民館等にて一冊四〇〇〇円で好評発売中です。

今回は、『近江日野の歴史』第二巻「中世編」の第二章「日野の中世社会と文化」の内容を紹介いたします。

中世の宗教

中世は、物語としても知られている源平合戦や、源頼朝による鎌倉幕府の成立など、武士を中心とする時代とされています。その中世という時代で忘れてはいけな存在に宗教があります。第二章では、天台宗・真言宗・浄土宗といった仏教と、神仏習合の考え方に基づき、仏教と一体のものとしていた神社を取り上げています。

第一節「中世仏教の展開」では、まず中世仏教全体の流れが分かりやすく説明されています。近江国内で絶大な勢力を誇った比叡山延暦寺において、天台浄土教が派生し、末法思想の浸透とともに浄土教信仰が広まり、ついには鎌倉新仏教の一つである浄土宗が生まれ

ます。そして、その中世仏教の日野町内での展開が明らかにされています。具体的には分析されているのは、西明寺と大般若経や金剛定寺と縁起などです。旧仏教寺院だけではなく、新仏教寺院の町内での展開についても、浄土宗と禅宗を主として、詳しく述べられています。なお、現在の日野町内に所在する寺院の半数を占める浄土真宗については、第三章第二節「浄土真宗の展開と日野牧五ヶ寺」で詳細に述べられています。

第二節「馬見岡綿向神社と日野」では、中世においては、仏教と不可分のものと考えられていた神社について、比叡山延暦寺と日吉社（ともに大津市）の関係から始まり、日野町内の日吉（日枝）神社の分布について考察されています。また、中世での馬見岡綿向神社の祭礼と比都佐神社との関係についても詳しく述べられています。さらに、龍王山・綿向山に対する山岳信仰・山岳修行についてや、馬

見岡綿向神社を再建するために実施された勧進についても、さまざまな史料を用いて説明されています。

第三節「中世人の浄土教信仰」では、現在も町内各地に残されている石塔とそこに刻み込まれている銘文や近年の発掘調査成果など、古文書だけではなく多種多様な史料を用いて、当時の人々に広まった浄土教信仰について明らかにされています。特に興味深いものとして、重要文化財に指定されている比都佐神社境内の「石造宝篋印塔」とその中に納入された「水晶製舍利容器」や、日野住宅工業団



▲大谷古墓出土蔵骨器

地造成中に発見された「大谷古墓」など、中世人の信仰を物語る証拠品が町内に数多く残存していることがよく分かります。

中世の文学

中世の時代には、和歌や漢詩などが詠まれ、また、物語や説話も数多く生み出されています。

第四節「日野の中世文学」では、日野町の中世文学を語る上で欠かすことのできない「智閑」の法名でも知られる蒲生貞秀とその義兄弟の小倉実澄に焦点を当てています。まず、貞秀の歌集『智閑和歌集』や公家の日記などから、貞秀と当代随一の文化人である飛鳥井雅親などの公家との交流の様子が明らかにされています。また、著名な連歌師宗祇との交遊についても取り上げられています。実澄については、横川景三などの禅宗の高僧との交わりが詳細に記されています。そのほかにも、蒲生氏郷が参加した豊臣秀吉主催の百韻連歌『何衣百韻』や氏郷を中心に蒲生家の盛衰を記した多種多様な「蒲生関係軍記」などが取り上げられています。中世日野の豊かな文化的土壌の一端をぜひご覧ください。